

大船津河岸
(鳥居は鹿島神宮
「一の鳥居」)(右)



1922 (大正 11) 年秋の遠漕 (『土浦中学生と霞ヶ浦』より)

Acanthus

(土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語)

第178号

2024 (令和6) 年5月21日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>



進修同窓会 HP にアクセス

霞ヶ浦遠漕……大正期の遠漕

大正期に入っても、土浦中学生たちは、夏休みや休日を利用して遠漕を試み、霞ヶ浦に挑んでいました。『進修』誌上の遠漕記には、その奮闘振りが綴られています、中には笑うに笑えない失敗もありました。

引用文中の【 】内は筆者による注記です。旧字体は新字体に改めました。

なお、今号で紹介する「鹿島遠漕」に係る航路図を進修同窓会HPの『月刊Acanthus』第178号3頁に掲載しています。

1913 「大正2」年 「鹿島遠漕記」

5年稲葉三郎(中13回)

(1914年3月発行『進修第17号』所収)

1913年10月4日土曜日、5年艇(国語科出口隆治先生と5年生9名)、4年艇(理科関根台次郎先生と4年生10名)、3年艇(数学科梅田政治郎先生と3年生8名)の3艇は、「鹿島に詣でん、と午後1時35分」に、川口の艇庫を出航しました。稲葉たちの5年艇(霞号)は、30分交代で漕ぎ進め、三叉沖へ。「愛らしい蝶々が5つ6つオールに戯れ」、クルーからは軽口も飛び出します。

M「こんな所にどうして蝶々が生活して居るのだらう。」

P「風の力で動物が移住をする所さ。ダーウィンもガラパゴス島の動物をこれで説明したのだ。」

Q「君は大変観察が鋭敏だな。」

R「いやP君が間違つて居る、蝶変じて蛤となるのさ。」

P「R君。君はそれだからオタンチンのパレオロガス^(注1)だと云ふのだ。」

R「何んだ。」

P「オタンチンのパレオロガスだよ、君は。」

R「何んだそのオタンチンのパレオロガスと云ふのは。」

P「【英語の辞書の】ウエブスターでも引いて見る。」

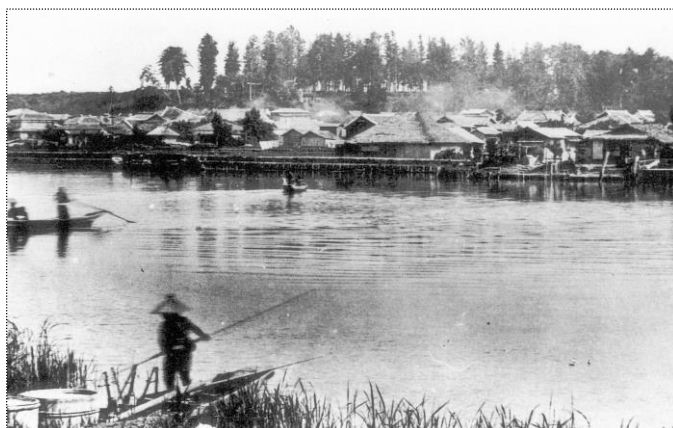
しかし、三叉沖をなかなか通過できず、漕手も疲労の色を見せ始めましたが、出口先生は独り、船尾で悠然たるもの。それを見たP君は、「先生は先生で万事違

つたものですね。」と言いながら、時計を見て、「4時の夕食ですね。」と続けると、先生からは、「さうさ。千里の馬だもの。」との答え。皆がドツと笑い出し、P君が、「然り。馬の千里なるもの一食或は粟一石を尽す。此の馬や、千里の能ありと雖も食飽かず力足らずして才華【さいか 優れた才能】外に見はれ【あらわれ】ず。嗚呼！豈に【あに】徒らに【いたずらに】槽檻【そうれき 家畜の飼料を入れる桶】の間に駢死【へんし 首を並べて死ぬこと】すべけんや焉。」と、講釈を並べ立てますが、S君はさつさと弁当を開き始めました。N君が、「寄宿舎の大織冠事^(注2)のSもやつぱり違ふね。」と突っ込みを入れると、S君、すかさず「其れ真に馬なき耶。其れ真に馬を知らざる也ハハ。」と返しました。船中にわかに活気づいて、互いに言い合ううちに、千里の馬の出口先生を筆頭に皆が夕食を済ましてしまいました。

右岸に浮島を見る頃には日も暮れて、アーク燈^(注3)に点火し目印としましたが、4年艇と3年艇とは、はるか後方に遅れています。黙々とオールを漕ぐこと3時間、目標を失つて暗闇の湖上を迷漕。3年艇、4年艇も同じと思われ、合図の喇叭の音が遠く聞こえるだけです。

何とか左岸に見える燈火を目標に漕ぎ進め、ようやく牛堀に到着。時に午後7時30分。波止場の赤い電灯や四角の窓の無数の光の影が、水に落ちて漂い、漁夫のわめき、のしる声を聞いた時、クルーの心は解け、ほっと一息ついて、元氣回復。牛堀から潮来へと北利根川(別称常陸利根川)を漕ぎ進めるうちに、再び軽口も飛び交い始めます。

H「ヴェニスやうだね。」
P「君は嘗てイタリアへ行つたか。」
H「小室先生が教へた。」
霞ヶ浦・利根川水運の河岸として栄えていた潮来は、宿屋や商店が川沿いに立ち並び、その下を通る度に鰻の蒲焼きの匂いが漂ってきます。



大正期の潮来

P「おいH君。イタリアでも鰻の蒲焼きを食ふか。」

H「イタリアでは鰻の蒲焼きの代りに蝸牛【かたつむり】の壺焼を食ふのさ。」

Q「鰻の蒲焼と蝸牛の壺焼はコントラストが変だな。」

艇の後尾からも、たわいない話が起きます。

O「吾等はギリシアからヴェニスへ貿易に來たユダヤ人だと想像して見給へ。」

M「その舟に千里の馬が乗つて居るんだから変だね。」

先生もとうとう吹き出してしまいました。

潮来から大船津へは「2里半(約10km)の波路だ、と。両岸に真菰【まこも】の茂った水道を進むうちに、穏やかな春の海のような広い水域に出てしまいました。舵手は目標を失い、迷った迷ったと大弱り。「目標は北浦だから左へ左へ。」と判断し、闇黒の中を漕ぐこと、2時間余。手は痛み、糧食は尽き、軽口どころではなく、全員沈黙。松虫の声を頼りに、真菰の中の漁師の家に立ち寄り、苦しいばかりの蜚声を張り上げて、熟睡中の漁師を起こし、航路を尋ねます。

一同「大船津まで何程ありますか。」
漁夫「二里半もアンデスペネー」
一同「サンキウ。グッドバイ。」

元気を回復して、一同、力強く漕ぎ始めます。

S「君、アンデスペネーと云ふ単語を知つて居るか。」

P「知らん。」

S「二里半と云ふ訳だ。」

P「新語だね。」

S「丸善^(注4)の五十銭の辞書へ寄稿するんだ。」

4番を漕いでいた稲葉は、交代してもらい、外套にくるまつて、1時間も眠ったと思つた時、ようようにして大船津の棧橋に到着。実に長い「2里半」でした。深夜12時に鹿島の小学校に辿り着けば、

豈に計らんや、4年生、3年生のクルーはすでに白河夜船。5年生クルーにとつては、実に腹立たしい限りです。4年艇、3年艇は、潮来から前川を経て北浦へ抜け、いわば3角形の1辺を通つて大船津へ。5年艇は、北利根川を直進してしまい、外浪逆浦、鰯川を經由し、3角形の2辺を漕いで来たのです。稲葉たちは、もう前後不覚の状態で、外套を来たまま折り重なつて眠りこけてしまいました。時に0時30分。

5日は鹿島神宮を参拝。鹿島灘で浩然の氣を養い、午前8時に大船津を出航。帰りは、3艇とも、北浦、前川を通り、麻生で昼食を摂り、午後3時に無事に帰港しました。

^(注1) オタンチンのパレオログス

^(注1) コンスタンティノス・パレオログス 英語読み コンスタンチン・パレオログス。東ローマの最後の皇帝で、帝国の滅亡を招いた。かなり出来の悪い皇帝であつたようで、これになぞらえ、漱石が、『吾輩は猫である』の苦沙弥(くしゃみ)先生を介して、山羊の相場を知らない妻に向かつて、『オタンチン・パレオログス』というくだりがある。『コンスタンチン』と聞抜けを意味する『オタンチン』とを掛けたものと説明されている。この語は、漱石が鏡子夫人をからかうために実際に使った洒落であつたという。

^(注2) 大織冠事

「大織冠(たいしよかん、たいしよかん)は、大化の改新後に制定された官位の最高位で、後の正一位に相当する。中臣鎌足が死を前にして与えられ、他の人に授けられた例がないので、鎌足自身を指している言葉として定着した。ここでは、寄宿舎の「大食幹事」と掛けている。

^(注3) アーク燈

アセチレン灯。アセチレンを燃料とする照明具。筒に入れたカーバイドに水を加え、発生したアセ

チレンガスにパイプの先で点火する。独特の臭いがある。

^(注4) 丸善

^(注4) 1869「明治2」年に福澤諭吉の門人・早矢仕有的(はやしゆうてき)が創業した書店。早矢仕は、福沢の意を受け、書籍を中心とした西洋物品の輸入事業を行い、日本の近代化の促進に大きな足跡を残した。

近代日本における西洋の文化・学術紹介に貢献し、その紹介する商品によって培われた気風は、『丸善文化』と呼ばれ、多くの文化人に愛された。

1924年 霞ヶ浦周航

その後も、土中生たちは夏休みや休日を利用して、霞ヶ浦遠漕を楽しんでいたが、中には、笑い話のような失敗をしでかすグループもありました。中25回黒田武重は、^(注6)「昭和38」年4月発行の『進修同窓会報1号』に「あの頃この頃」と題して、^(注4)「大正13」年の夏休みに試みた霞ヶ浦周航での出来事を次のように記しています。

「……在学中に特に懐かしく、楽しかった思い出の一つ二つを記してみたい。四年生の時だったと思う。夏休みを利用して一週間ばかり親友八名とボートで霞ヶ浦を一周した時である。参加者の中には、今は高砂食堂のおやぢである飯田稚松君や常陽銀行の支店長をやつていた佐竹清郎君、北海道に居る大日精化工業取締役の飯村三郎君なども居ったが、今でも親しいつき合いを続けて居る。真鍋小学校時代からの同級生で特に親しかった殿里の菊田小四郎君も一緒だった。終戦直後朝鮮で戦病死したのは惜しまれてならない。小学校やお寺などへ泊

めてもらうなど無銭旅行に等しかったが大いに青春時代を謳歌する事が出来た。銚子まで下つて行つたが最後の宿泊地は潮来だった。一日位はヤドヤへ泊まるうではないかということになって、一同意気揚々と、とあるやどやへ乗り込んだ。酒を飲んだり、校歌を唱ったりして大いに氣勢をあげたが、翌朝勘定を支払う時になって昨夜の元氣はすっかりなくなつた。誰も無一文だったからである。誰かが持つて居るだろうということで、八人が名々【銘々】の人のふところをあてにして居た訳であつた。困つてしまつたが潮来には一年先輩の磯山【利雄】中24回【さん(今は検事正)が居ることに気がついた。代表が早朝出かけて行つて、金を借りて支払いをすませ、無事帰る事が出来た。まことにナンセンスな出来事だったが、愉快な思い出の一つである。……」

何とものんびりとした話ですが、いつの世でも頼りになるのは先輩。有難い存在です。

こうして、土中生たちは、「海国男子」との意気込みでオールを握り、「山と立ちくる大波も千尋の底の淵とても慣れて我家に異ならず嵐も吹かば吹けなんぞ恐れん海国男子……」と、遠く遙かに筑波峰を仰ぎ、茫々たる湖上を漕ぎ渡っていました。